

『上から来られた方』 ヨハネ3:31-36

3:31 上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。

3:32 彼はその見たところ、聞いたところをあかししているが、だれもそのあかしを受けられない。

3:33 しかし、そのあかしを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。

3:34 神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

3:35 父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。

3:36 御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである」。

●序論

「天と地ほどの差がある」「開きがある」という隔たりの大きさについて、聖書はバプテスマの言葉を用いてはっきりと語ります。

3:31 上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。

3:32 彼はその見たところ、聞いたところをあかししているが、だれもそのあかしを受けられない。

先週見たところで、弟子たちは師であるバプテスマのヨハネに迫りました。あのイエスという人が、向こうで洗礼を授けていて、みんなあっちに行っちゃっています…と。いいんですか…と。

そこでヨハネは、あのイエスさまの栄光が表されること、人々があの方のところに行くことを見てわたしは喜んで…ということ語りだしていました

。そして今日、自分は地から出た者であり、イエスさまは上から来られた方であると表現してそこに天地ほどの差があることを語りだしているのです。

●本論

I. すべてのものの上にある方

3:31 上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。

3:32 彼はその見たところ、聞いたところをあかししているが、だれもそのあかしを受けられない。

この3章はイスラエルの高名な教師ニコデモとの対話から始まっています。

ニコデモは、夜訪ねてきて、イエスさまに向かい開口一番こう話しました。

3:2 …「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神がご一緒にないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません」。

彼は、イエスさまのことを「神から来られた教師」つまり「上（天）から来られた方」と認め、さらに「神がご一緒である」と表しました。

そこまでわかっていながら、その後のイエス様との会話は彼にとってフラストレーションのたまるものであったかもしれません。

イエスさまは

3:3 …「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。

それに対して答えます。

3:4 ニコデモは言った、「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生れることができますでしょうか」。

イエスさまは「霊的に新しく生まれる」ことの重要性を語り、そうして初めて神さまとの新しい関係に入ることができる、ということをお話になりますが、しかし、その言葉にニコデモの経験と理解では追い付かなかったのです。

彼はそれまで、どれだけ自分が律法に正しくあるかという、自分の出来不出来を基準に、神さまの前に立つことを、教えられてきたし、また人に教えてきた人だからです。彼の経験と知識、つまり「地」で自分がとらえられてきた経験からは分からなかったのです。

ですから、彼の答えは、もう一度母から生まれる？そんな馬鹿な…という風な答えになります。

先日、「祈りのちから」という映画を、観ました。

主人公の女性は夫婦関係に行き詰まりを覚える中、仕事の関係で老婦人と出会います。この老婦人は、とても祈り深いクリスチャンで、彼女の持っている悩みに気づき、そして彼女の霊的な状態を探ります。

主人公の女性は答えます。「わたしは、世間一般の人と同じようなクリスチャンです」と。この老婦人の問いかけに軽くかわすのですが、そこから彼女の中に、神さまに気づくための動きが始まる…そういう物語でした。

わたしたちは、この地で生き、この地における世間一般的な常識人として生きているという自負を持っているでしょう。ある意味ニコデモも同様でした。

そんな私たちに、イエスさまは霊的な気づきへと招かれるのです。

そのうえで、このイエス様の言葉に耳をたか向ける者についてこうヨハネは語ります。

3:33 しかし、そのあかしを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。

Ⅱ. 神の言葉を語る方

3:34 神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

上から来られた方、つまりイエスさまは、まさに「神がお遣わしになった方」として、

ヨハネは証言します。

そこに「地」から出て「地」に属する自分との「天と地ほどの違い」を語りだしています。

そして、彼のその言葉に卑屈さはありません。ましてや弟子たちの前で、自分を大きく見せようなどというような見栄もありません。

彼を見てください。彼はその「天と地ほどの違い」を心から喜んでいるのです。

3:29 …彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。

そしてこうも続けます。

3:30 彼は必ず栄え、わたしは衰える。

ヨハネ自身もまた待ち望んでいた方だからです。神がお遣わしくくださった救い主だからです。

この方に、神は聖霊を限りなく注ぎ、そのわざは、神由来のものとして人々の霊的うえ渴きに流れ込んでいくことを、彼は見て喜びにあふれていたのです。

ヨハネ自身とそのバプテスマは、人を救うものではないということを彼自身がよく知っていました。人を救うためのバプテスマは他にあると。

人は人の力では救われぬ。つまり、人は自分の力でも、誰か人の力でも救われることはない。血縁でも、誰かの業績でも。残念なことに人は、罪というしがらみの中にある。

だから彼自身が待ち望んでいたのです。自分の後に来る方、つまり救い主が「世の罪を取り除き」、聖霊によってバプテスマを授ける方を。そえrがイエス・キリストです。

彼の感動の言葉が記録されています。

1:33 わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。

1:34 わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」。

この方は、神の言葉を語るのです。そしてその言葉を聞いて、この方こそ救い主であると信じる時救われるのです。

1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

とある通りです。ただ信じて、神がわたしを救われる、と確信できるのです。

Ⅲ. すべてをご支配くださる方

3:35 父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。

①その万物に、わたしも含まれるということです。

善なるイエスさまは、罪びとである私を見て、我慢がならない、いらぬ…と言って裁き滅ぼすこともできるほどの権威をも与えられていたということです。

②しかし、イエスさまは与えられずすべてのものを、裁くためではなく、救うためにご自身の命をも捨ててくださいました。

これが、あの十字架で証される愛であり、福音の語るところです。それは父なる神さまと心を一つにされた出来事でもありました。

3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

だからはっきり言われているのです。

3:36 御子を信じる者は永遠の命をもつ。

そして一方でこの方を拒むのであれば、その与えられた滅びからの救いと命を手放すことでもあるとわかるのです。

…御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである」。

これほどまでの愛をスルーすることのないように、その愛に、自分を明け渡していくとき、そこから見えてくる神さまありきの人生が開かれていくのです。

さいごに)

この3章を振り返って、イエスさまは、天から来られた方であることを、ニコデモも知ってました。バプテスマのヨハネも証言していました。

ただし、自分の頭で知っていること、わたしを救うために来られた上よりの救い主であると信じて、全幅の信頼を寄せて生きることとは、「天と地ほどの」開きがあります。

イエスさまを自分の人生の主、救い主として信じて歩み始めてわかることがあります。それは自分が、自分の人生や周囲を支配しコントロールして生きる「自分始まり、自分中心」の生きざまと、わたしを独り子をくださるほどに愛し、すべてをよくご存じの神さまのご支配に入り、「神さまに始まり、神さまに導かれて」歩いていくことの違いです。

そこに「天と地ほどの」違いがあるのです。

人生を、イエス様始まりにしていくとき、霊的な視界が開けます。

これほど楽で喜びに満ちたものではありません。あのバプテスマのヨハネが、まさにイエスさまを見て、ああ私がやってきたことのすべてのを、神さまが祝福してくださっている喜びを経験することができたのです。

上から来られたイエスさまを信じて、信頼して、この方共に歩むことは、お勧めです。

この地、由来の祝福と天と地ほども違う、天からの祝福に目が開かれていくことに、ぜひ目をむけていてください。